11.5mg/dlと高かつた．

6) Glucose は76mg/dlであり尿素窒素は 3.2mg/dlと低値であつた．

7) 以上の測定結果をもとにして調製した鯉網膜用潅流液 (NaCl 170mM, KCl 7.69mM, $CaCl_2$ 2.65mM, 0.05Mトリス緩衝液でpH 8.4に調製) 内では，一般の冷血用リンゲル液 (NaCl 111mM, KCl 2.82mM, $CaCl_2$ 2.25mM, 0.066Mリン酸緩衝液でpH 7.2に調製) を用いて潅流した場合よりも網膜に対して，はるかに好適であることを確認した．

3. 火傷死の4剖検例

(第2病理)

○窪田　雅・羽野　寛・梶田　昭
(外科) 織畑　秀夫・太田八重子

本教室で経験した火傷死の4剖検例について病理解剖学的所見を中心に報告する．SN4063 (50歳，女子)，5967 (56歳，男子)，6418 (70歳，男子)，6434 (30歳，男子) の4例で，火傷範囲はそれぞれ30～35%，90%，35%，75%，火傷から死亡までの日数は22日，3日，28日，32日である．

全例に共通した臓器変化としては，腎の急性腫脹，消化管出血 (第1例を除く)，肝における種々の程度の脂肪化が挙げられる．肺の滲出は一定した所見ではないが，第1例では硬塞を疑わせる出血，第2，第4例では浮腫ないし出血の形で認められる．

火傷後の水・電解質代謝失調と関連して腎の変化が注目される．それぞれ 190g，265g，195g，235g (左右平均) と腎重量の増加が目立ち，組織学的には，細尿管の拡張，間質の浮腫など間質性腎炎あるいはショック腎と共通の性格の変化とみなされる．とくに腎重量が 200gをこえた第2，第4例では間質の浮腫，細尿管上皮の萎縮，変性が著明であつた．腎変化の推移が火傷後の経過を決める上で，きわめて重要な役割を果していると思われる．

4. Soft Contact Lens による角膜疾患の治療について

(眼科) 金子　行子

Soft Contact Lens の臨床応用の代表的なものに前眼部疾患に対する治療がある．今回16例20眼の臨床経験を得たので報告した．対象内容は，水疱性角膜炎，角膜乾燥症，角膜潰瘍等で，その大部分が有効であつた．

水疱性角膜炎には5%高張食塩水を併用し，全例効果があつた．

角膜乾燥症は，乾性角結膜炎，兎眼性角膜炎等であるが，生理的食塩水の頻回点眼を併用している．有効例も多いが，涙液減少によりむしろ Soft contact lens が刺激となる例や，特有の眼脂による lens の白濁など改善すべき事が多い．

角膜潰瘍に対しては，結膜弁被覆が必要と思われるような場合に用いている．特に他眼に視力がないため，患眼に結膜弁被覆が出来ないような場合，非常に便利である．しかし，緑膿菌をはじめとする諸感染症の危険，角膜表層性の血管侵入などに充分留意する必要があると思われる．

5. 当科で経験した重複癌症例とその考察

(放射線科)

○大須賀澄江・成松　明子・関口　幸子
宮崎麻知子・坂本和歌子・木村　礼子
池田　道雄・伊藤よし子

1966年6月1日より1975年5月31日までの当科における外来総数は4972名であり，そのうち悪性腫瘍患者は4534名であつた．このうち重複癌症例は24名であり，全悪性腫瘍患者の0.51%に当たる．主たる治療が放射線で行なわれ，経過観察がゆきとどいている舌癌および子宮頸癌患者に注目して統計学的考察を試みた．

頭頸部悪性腫瘍患者総数は 596名であり，そのうち舌癌は79名であつた．舌癌を含む重複癌症例は5名であり，全舌癌患者の6.32%であつた，かなり高率である．また女性生殖器悪性腫瘍患者総数は 696名であり，そのうち子宮頸癌患者は 533名であつた．子宮頸癌を含む重複癌症例は8例であり，全子宮頸癌患者の 1.5%に当たる．これは癌研婦人科の報告による 1.8%とくらべて大差なかつた．またこの8例のうち4例は乳癌との重複であり，子宮癌と乳癌が性腺関連臓器における系統癌であるという印象をうけた．

近年重複癌のみつかる症例が増えていることより，癌患者に対する綿密な経過観察が必要であると考える．

6. 三尖弁狭窄を呈した横隔膜ヘルニアの1治験例

(心研小児科)

○長井　靖夫・三森　重和・高尾　篤良
(放射線科)
重田　帝子・山崎統四郎・小林　直紀
(外科) 織畑　秀夫・木村　恒人

胸腹裂孔ヘルニアは乳児期早期より症状の発現があり，重症の疾患として知られている．われわれは右胸心，心室中隔欠損症，肺 Sequestration hemivertebrae を